

9月16日(土) 研究発表第8室(723)

大学における英作文指導の在り方：英作文実態調査の報告

Learning to Write English by Writing in English

岡田 妙 (同志社大学)・奥村 清彦 (滋賀県立大学)・時岡ゆかり (大阪産業大学)

英作文指導 自由英作文 単語数 実態調査 上・中・下位群

「英作文指導」に関心をもつ我々のグループはコミュニケーションを目指した英作文指導の在り方について1993年4月以来、研究と実践を重ねてきたが、その一環として、1994年4月と12月に各自の担当クラスを対象に、共同で英作文に関する実態調査を行った。調査結果の中には、大学における英作文指導の在り方について示唆を与えてくれるものが数々あると思われる。

「英作文」か「ライティング」か：本グループの各自が目指している英作文は「和文英訳」ではなく、「文法・作文」でもない。たとえ学生の英語能力が限られている場合でも、何らかの形で「思ったこと」を英語で表現する手段を与え、そのことによって表現意欲や表現能力を開発していくことを各自、目指している。要するに「伝達のために英文を書く」ことを目標にしているのであるから、「和文英訳」や「文法・作文」と区別するために「英作文」という言い方を避けて「ライティング」と言い換えた方がよいかもしれない。つまり英語を「使う」ことによって学習者が何かを「伝達する」ような形で「英語を書く」ことを研究対象にしているのである。

実態調査へのきっかけ：「書く能力」は「読む・書く体験」の量と関係があるだろうか、我々の担当する学生は高校時代にどの程度、どのような内容の英作文を経験してきただろうか、英語による読書体験や英文を書く経験の多かった者は、経験の少ない者より優れた作文力をもっているだろうか、などの疑問点についてアンケート調査を行うことにした。

調査目的と日程：調査の目的は、学生の英作文能力に関する実態を知り、今後の指導の在り方を検討することにある。また、英語による読書体験や、英作文に対する関心・意欲が学習者の側にどの程度あるか、日本語の読み書き体験はどの程度あるか、などの関連事項についてもアンケート資料を得て、今後の参考にすることにした。さらに、4月の調査にはプリテスト(pre-test)の機能を与えて、12月に再度、類似の調査を行い、一年間の指導成果の目安とすることにした。

調査対象者：研究グループの各自が担当するクラス(7大学26クラス)を調査対象にした。4月の対象者数は1027名、その内訳は短大生262名、4年制大学生765名、そのうち英米語・文学専攻生が329名、その他の専攻生が698名、また、1年次生は459名、2～4年次生が568名である。

調査内容：4月の英作文調査では、被験者は所定時間内(15分)に、一定の話題について自由英作文を書き、書いた量(writing fluency)の目安として単語数を記入してもらった。同時に、総合的な英語力の指標としてクローズテストの一種であるCテストを行うと共に、これまでの英作文体験等に関するアンケート(8項24問)調査を実施した。12月の調査も、Cテストと自由英作文については、ほぼ同じ形をとり、アンケート(6項20問)調査では、主として一年間の英作文体験について問うた。

4月の調査結果のあらまし：4月のアンケート結果について全体的に言えることは、次のような点である。

- (1) 学生は教科書の精読以外には、ほとんど英語を読んだ経験がない。
- (2) 英語を「書く」経験が非常に少なく、その9割以上は単独短文の英訳練習である。
- (3) 2段落以上の自由英作文をまったく経験していない者が8割以上いる。
- (4) 英文を「書く」に際しては文法事項が最も重視されている。
- (5) 英作文を提出した経験のない者が約3分の1いる。
- (6) 提出経験者のうち約3分の1は提出した英作文に訂正事項を記入して返してもらっている。
- (7) 日本語でものを書いた経験も、書いた量と話題の範囲の双方において限られている。
- (8) 英作文を練習してみたい興味・意欲は「大いにある」(32.1%)と「少しある」(45.8%)を合わせると8割に近く、英米語・文学専攻者では92.2%に上っている。

Cテストの成績(平均点54.2、標準偏差15.9)と自由英作文の中で書かれた単語数(平均90.1語、標準偏差44.8)との相関は全体としては緩やか(0.56)で、Cテストの点数の低い者は英作文の単語数が全般的に少なく、個人間の相違も小さい。それに対して、Cテストの点数の高い者は単語数が比較的多いだけでなく、個人間にばらつきが見られる。

4月の1年次生上・中・下位群別(各50名)の調査結果：英作文の単語数とCテストの結果に基づいて、一年次生の上位、中位、下位に位置する者を50名ずつ選び出し、アンケートの回答にどのような相違があるかを分析した。分析結果には数多くの示唆が含まれているが、大学入学以前に読み書きの経験の多い者は全体として英作文力に富んでいる。

作文評価：自由英作文の全体的なできばえを評価するために ESL Composition Profile を簡略化して使用し、評価値と英作文の単語数との相関を調べたところ、(評価に際しては可能な限り、単語数の多寡のみに左右されることのないよう心掛けたにもかかわらず)その相関係数(0.92)は非常に高かった。

12月の調査とその結果：12月の調査結果についても4月と類似の分析・検討を行い、また4月の調査結果との比較によって、今後の指導の参考資料を得ることができた。一例を挙げると、今後の英作文練習について語彙の学習の必要を感じる者、また感想文のようなまとまった英文の練習が有益と考える者が最も多い。

なお、自由英作文の単語数は4月の平均90.1語から116.2語へ増加(標準偏差44.8→53.9)し、Cテストの成績も4月の平均点54.2から65.5まで(標準偏差15.9→16.7)上がった。

12月の1年次生上・中・下位群別(各39、40、39名)の調査結果：4月の上・中・下位群150名のうち、12月の調査に参加した118名のアンケートに対する回答をまとめた結果、群間に興味ある相違が見られた。例えば、英文を書き始める前に内容について「考える」者は上位群に多く、下位群はほとんど考えない。英文を書いているときにも上位群は「文全体の筋道」や「内容の豊かさ」について考えるが、中位群では「単語の選択」と「文全体の筋道」という答えが比較的多く、下位群は「単語の綴り字」に気を取られがちである。英文を書くに際して文法・語法が「大いに難しい」と答えた学生は下位群に多く、「単語・熟語・表現」は中・下位両群に多い。「句読点」や「段落の区切り方」を難しいと感じる者も下位群に比較的多い。しかし、4月以来、英作文が「大いに向上した」と答えた者が少数ながら他群より下位群に多かった。

これらの調査結果を基にして今後とも英作文指導の在り方を模索していく必要がある。

9月16日(土) 研究発表第8室(723)

図1 1994年4月C-テストと単語数の相関分布
4-99点、11-307単語(830名)

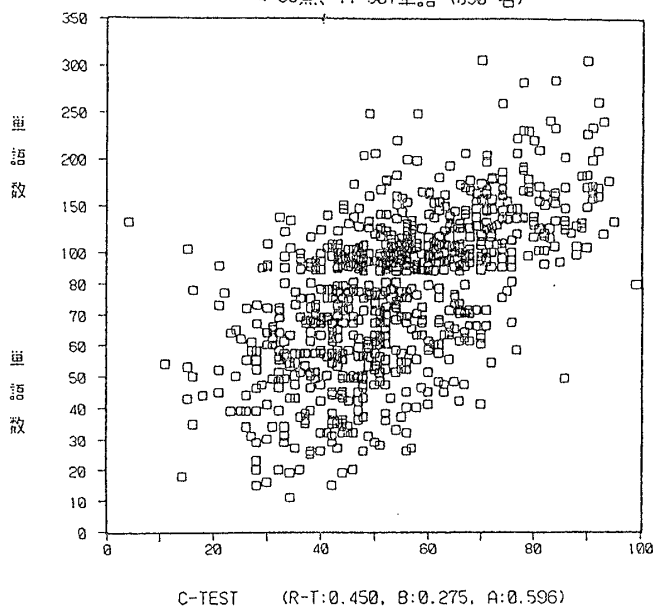


図2 英作文単語数比較(四月 1018名、
十二月 746名をいずれも100として表示)

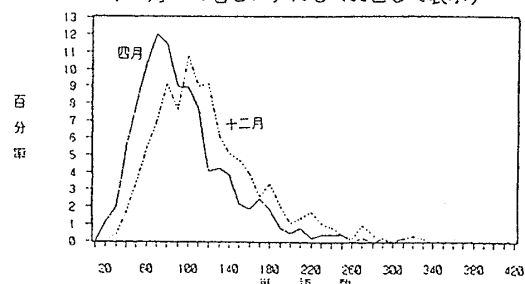


図3 作文評価値と単語数の相関
一年次生 サンプル 60名分

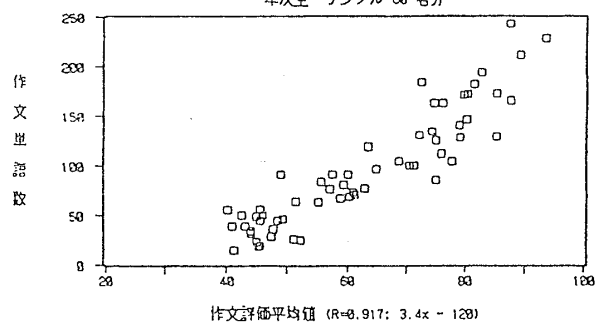


図4 やさしい英語の読み物の経験

1年次生 459名
たびたびある (4.1%) 無回答 (0.4%)

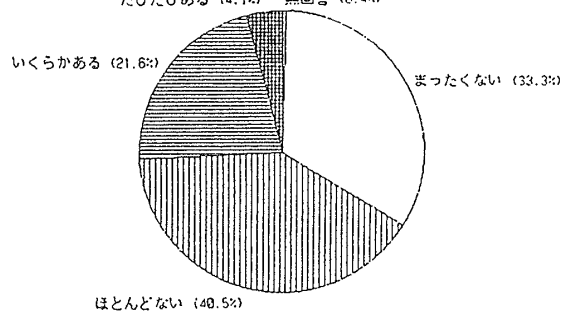


図5 英文を書く練習に対する興味

1年次生 459名
まったくない (2.2%) 無回答 (6.5%)

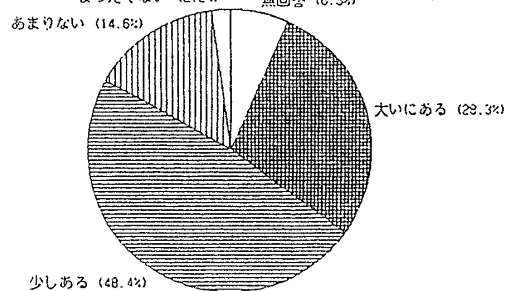


図6 英作文練習の成果について:
向上したと思う点

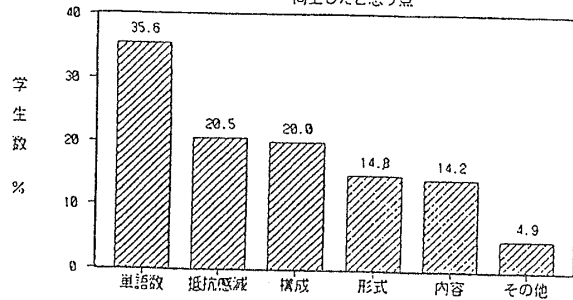
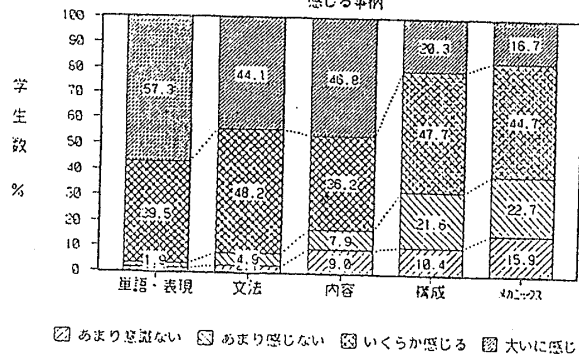


図7 英文を書くときに難しいと感じる事柄



9月16日(土) 研究発表第8室(723)

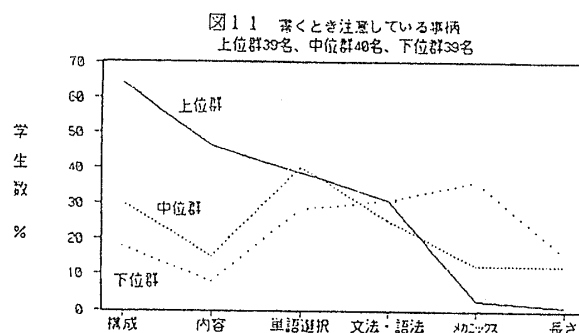
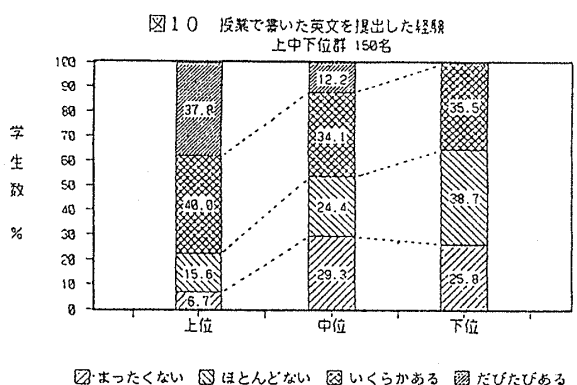
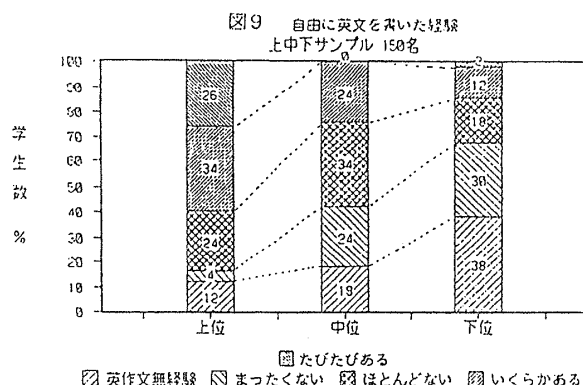
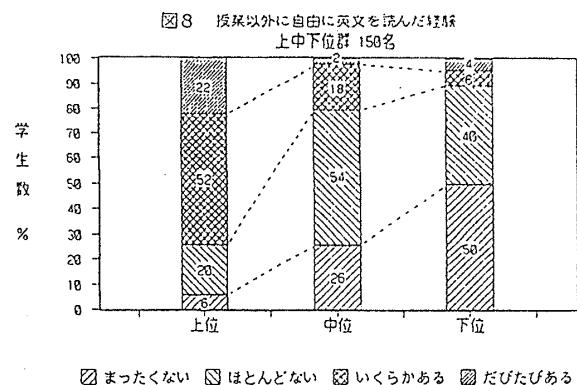


図12 英文を書くとき難しいと感じる事柄
1年次生 上中下位群 118名

